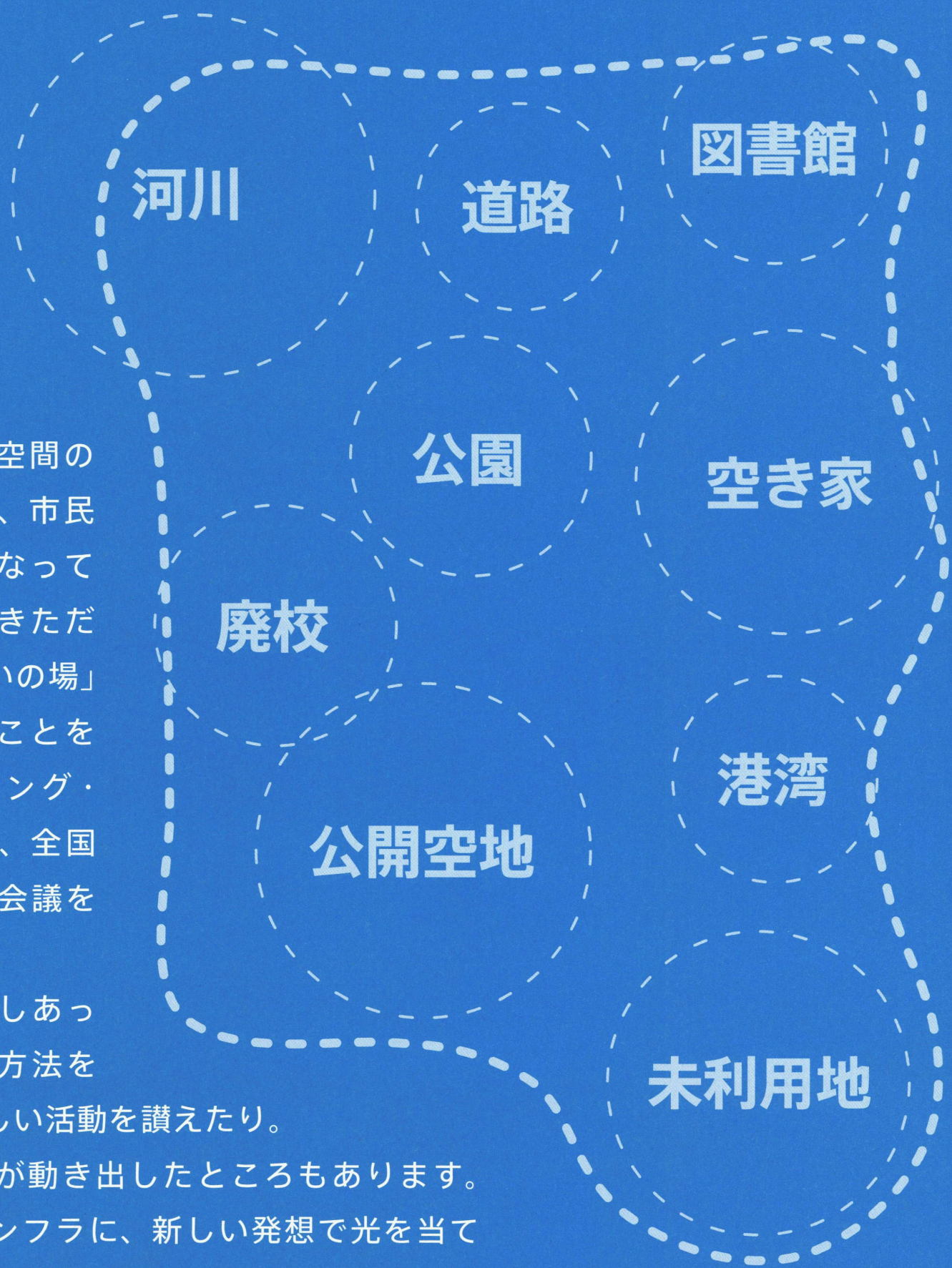
ミズベ、

2014年春にスタートしたミズベリング・プロジェクト。公共空間の１つでもある水辺が、手を挙げたイノベターたちによって、いま変わりつつある。行政マンから企業マン、音楽プロデューサーまで、その活動の最前線がここにある。あなたの水辺創造の、導火線になれば、と思う。

ところで公共空間は、誰のモノだ？



いままで公共空間の在り方について、市民も行政も一緒になって論議がなされてきただろうか？「出会いの場」の不足。そんなことを感じたミズベリング・プロジェクトは、全国各地で数多くの会議をしてきました。

アイデアを出しあったり、利活用の方法を模索したり、新しい活動を讃えたり。すでに社会実験が動き出したところもあります。無意識だったインフラに、新しい発想で光を当てるだけで、そこに人が集まり、ビジネスが生まれ、笑顔があつまる。無名な場所が、賑わう場所になる。

そんな公共空間の大きな可能性を、公共空間と利用者を結ぶマッチングサイト「公共R不動産」を運営されている馬場さんに、公共空間、そして水辺の未来創造について聞いてみました。

馬場正尊（ばば まさたか）
建築家・公共R不動産ディレクター・東北芸術工科大学准教授・Open A代表。
数多くの建築・設計の見地から、世の中の公共空間の在り方に疑問と可能性を問う。
近著「PUBLIC DESIGN～新しい公共空間のつくりかた（学芸出版社）」。2014年、
ミズベリング東京会議のワークショップでファシリテーターもやっていただいた。

「公共空間」は、いつしか「行政空間」になっていた。

最近驚いたのは、児童公園にいったら、使っちゃダメ！の連呼なんですね。「ペットが糞をするから砂場に入るな」、「芝生は養生中だから入るな」、「ボール遊びは近隣に迷惑だからするな」。公園で映画上映会をやろうと思ったら、その使用許可のために「まずは組合つくってください」と言われる…。

本来、市民に開かれているはずの公共空間を使うだけで、ものすごく不自由になっている。これじゃパブリックスペースが、もはや「公共空間」ではなく、行政が管理するための「行政空間」になってしまったと感じました。

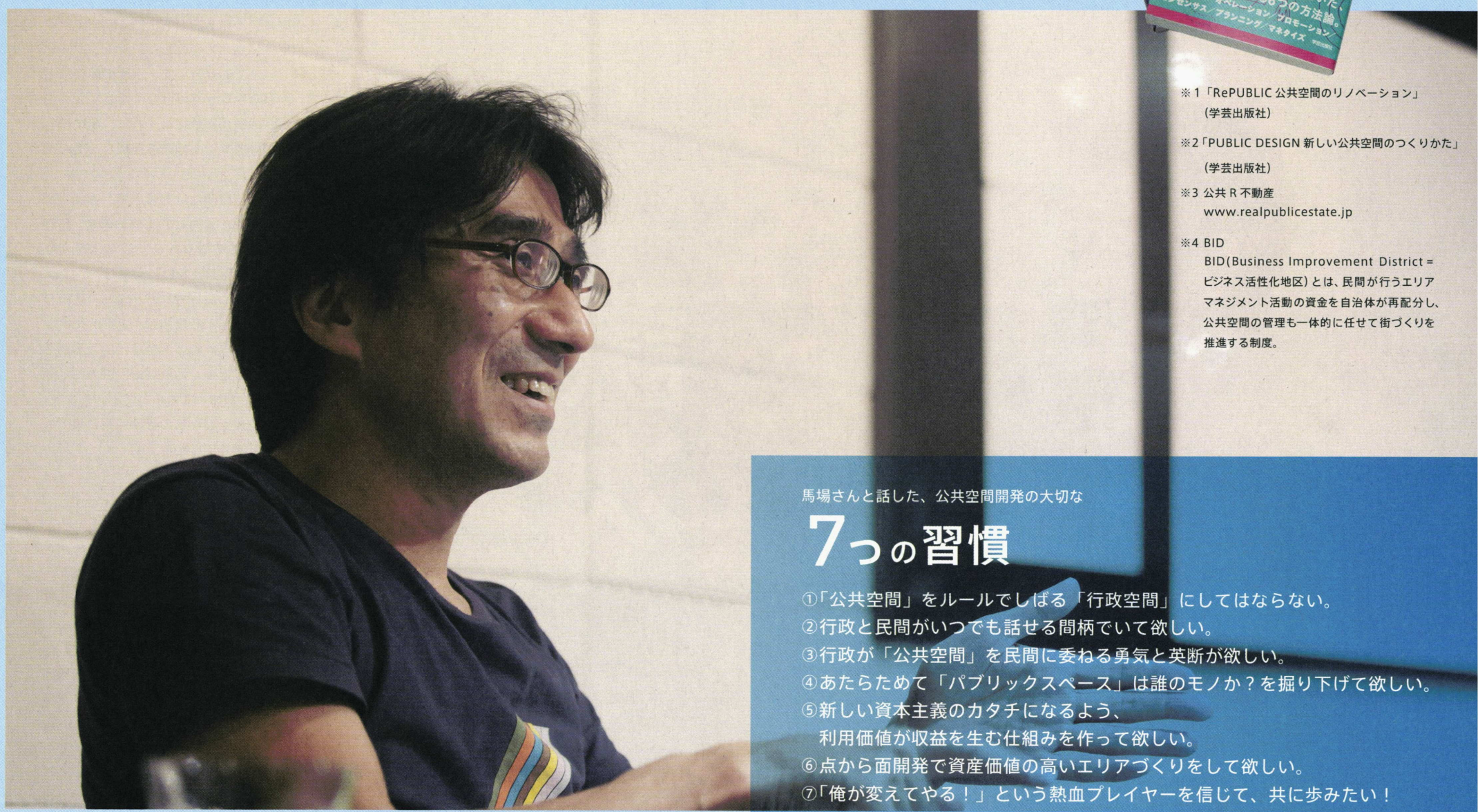
住民と行政の間にも溝がある。

同時に「団地の再生」をしていて、団地の住人の一人が、パブリックエリアの木を指して、「毛虫がいるから桜の木を切って！」「落ち葉が堆積して歩きづらいから、木を切ってくれ！」とクレームをつける。で、管理者が木を切ると、ほかの住民から「なぜ、切ったんだ、なんでだ？」と怒鳴られる。全くコミュニティの合意がとれていない。本来は自分たちの空間でもあるのだから、自分たちでなんとかする発想を持たないといけないはずなのに。行政も一部の声だけを聞いて、サイレントマジョリティの声を無視している。それは市民側にも行政側にも問題がある。関係づくりができていない。合意形成がホントにできていないことを知りましたね。

行政から民間に委ねる勇気と英断が欲しい。

財政状況も見ても、福祉にかかるお金は増加する一方で、人口は減り、税収も減っていくが、サービスの質は落とせないのも事実。だとすると、行政が重たく抱えていた「公共空間」を民間に委ねて荷を軽くしないといけないのは自明なんですね。

そこでそんな場所をマネジメントする空間の在り方や、デザイン手法、所有の方法を変えていかないといけない。そんなことを拡散しようと思って、2013年「RePUBLIC 公共空間のリノベーション※1」という本を書きました。



※1「RePUBLIC 公共空間のリノベーション」（学芸出版社）

※2「PUBLIC DESIGN 新しい公共空間のつくりかた」（学芸出版社）

※3 公共R不動産
www.realpublicestate.jp

※4 BID
BID（Business Improvement District＝ビジネス活性化地区）とは、民間が行うエリアマネジメント活動の資金を自治体が再配分し、公共空間の管理も一体的に任せて街づくりを推進する制度。

馬場さんと話した、公共空間開発の大切な

7つの習慣

①「公共空間」をルールでしばる「行政空間」にしてはならない。
②行政と民間がいつでも話せる間柄でいて欲しい。
③行政が「公共空間」を民間に委ねる勇気と英断が欲しい。
④あたらためて「パブリックスペース」は誰のモノか？を掘り下げて欲しい。
⑤新しい資本主義のカタチになるよう、
利用価値が収益を生む仕組みを作って欲しい。
⑥点から面開発で資産価値の高いエリアづくりをして欲しい。
⑦「俺が変えてやる！」という熱血プレイヤーを信じて、共に歩みたい！

この本の反響はどうでしたか？

お陰様でたくさんの声を頂戴しました。行政さんの方が多かったですかね。と同時に、異口同音、「じゃ、どうしたらいいの？」と。問題意識は全く同じ。では、「どのような方法でパブリックスペースを民間に委ねたらいいのか？」「どうしたら、こんなイメージを実現できるのか？」「手続きがよくわかりません！」「どうしましょう？」という逆質問の嵐。さらに、民間も「こういうことをしたかった！」「どう行政にアプローチしたらいいんでしょうか？」と。お互い、やりたいのは山々だけど、マッチングのシステムと運営の手法がほとんど存在していないということが明白になったのです。

いま一度「パブリック」の概念をみんなで掘り下げたい。

本を書いたことで、公共空間についてあらためて考えるきっかけになりました。「パブリック」という概念、「パブリックスペースとは、いったいなんだ？」ということです。僕らが考える次の時代のパブリックスペースは、「どんなカタチが理想なんだ？」「どう運営＆マネジメントしなきゃいけないんだ？」ということを考える必要が行政にも民間にもあると思うのです。取材していると、その答えは、いままでの行政が考えてきたフローやシステムの方法論の外にあると思えてきました。で、そこをまとめたい、調べてみたい、追求したい、と思って、続編として今回「新しい公共空間のつくりかた※2」を書いたんですね。

2冊目の特徴は？

1冊目の方は公共空間はこう使えるという企画書であり、今回の方は、それを実行するための方法論を探す旅にでた。そんなイメージでした。方法論を開示して、共有して、勉強プロセスをそのまま本にしました。2冊目で挙げた人たちは、既存の方法論とは違う方法でパブリックスペースのような空間をつくって運営している人。で、どうやってつくったの、なんでつくったの？どう運営してるの？という具体的な話を聞きに行きました。

公共空間は、新しいアプローチができる場所ですか？

この6人は、資本主義という社会システムの枠組みを否定もしていない、逆に利用しながらも、なにかを共有しながら、プロジェクトや空間、ものすごくハッピーな空間をつくろうとされている。誰もが自由に楽しく利用できる「素直な幸せ」づくり。そこに高度に所有を主張しない新しい資本主義のカタチがあるように思えました。

僕たちは、公共空間こそ、もっとも新しい資本主義の実験ができる格好のステージだと思うんです。パブリックセクターが持っている土地の上で、民間や企業や市民がパブリックマインドを持って維持・運営していくことを運命づけられた空間。いまの資本主義を新しく上書きしていくムーブメントが生まれはじめている予感がします。

「公共R不動産」はどういう経緯で？

同時に「公共R不動産※3」というサイトをつくりました。

行政は山ほど、なんとかしたい物件をもっている。かたや民間の人も公共空間を使って新しいことをしたいと思っている。お互いのニーズはあるけど、マッチングするシステムがない。

たとえば、北海道の公共空間情報は、その役場のウェブサイトの奥深いところに載っていて、見つかりにくい。そんな物件を欲している東京の企業はいるのに、その情報は届かない、わからない。

「公共R不動産」はお互いのニーズのミスマッチの解消です。行政と民間が情報クロスしながら、ニーズの交換が行われて、マーケットが活性化されて、新しいビジネスの発明やシステムが生まれるのではないか。ニーズの顕在化の新しいOS（エンジン）になりたいと思っています。

ミズベリング。水辺はどうですか？

水辺は巨大なパブリックスペースですし、水があるということで最も面白い可能性がある反面、法規制で最も難しいとも思っていました。港湾にしろ河川にしろルールも違うし、治水や防災があるのでパラメーターが多いですよね。権利者も複雑で。でも、よくよく勉強すると、意外に新しいこと（社会実験）ができることもわかってきて、これからすごく魅力的で楽しみな公共空間じゃないでしょうか。いまオリンピックで舟運という交通インフラも叫ばれはじめました。シカゴのような水辺のツアーとかを、やってほしいですね。「はとバス」の水上版。あれぐらいになるといいですね。

これからの公共空間は、点開発から面開発でエリアリノベーションの時代へ。

20世紀型マスタープラン型の計画ではなく、省益を外して小さな点の開発をたくさんリンクしていくネットワーク型の開発案をつくるべきだと思います。そして、そのエリアでBID※4のようにマネジメントして資産価値の高い人気のエリアをつくっていく。そんな行動が必要だと思います。

どんな人材が必要ですか？

「公共R不動産」に問い合わせをくださる自治体の方は、企業経験者が多いですね。「俺が変えてやるぞ」的な熱血マインドがある人。自治体の問題に問題意識がある人。未来の絵が描ける人。行政の言葉を民間の言葉に置き換えられるやる気のある行政マンが嬉しいですね。実際、そういう熱血行政マンが、そのまちの変革者になると思いますね。

リバービジネス創出家 田中謙次

環境文化研究所の最高研究責任者であり、リバービジネスの機会を創出するイベント「おしゃれなり・BAR」の仕掛人。
親子二代に渡り流域文化の継承活動に尽力。「サクラマスの駅伝」「日野川に砂礫河原をとりもどす会」「リバビズ大学」など地域のミズベと精力的に向き合い、行う活動は多岐に渡る。
またRAC（川に学ぶ体験活動協議会）トレーナーとして、子どもへの川体験指導や安全講座、キャニオニングツアーなどミズベ体験活動イベントを開催している。

「おしゃれなり・BAR」開催の着想と、日野川流域についてお聞かせください。

かなり長い前置きがありますがいいですか？（笑）。まず背景として、私は20年以上（株）田中地質コンサルタントという地質調査の会社で働いています。橋や道路、田んぼ、土砂災害などの地質を調査する仕事です。その仕事を通じてあるとき、日野川流域に110年程前の石積みの砂防堰堤（さぼうえんてい）が草木に埋もれていることがわかったんですね。埋もれているけれど、きちんと機能もしている。

砂防堰堤というのは、豪雨時に土砂が一気に流れ出ないようにくいとめ、災害や洪水氾濫から下流側の家々を守るためのものです。今の砂防堰堤というのは大体がコンクリート。こんなに立派な石積みの砂防堰堤というのは土木資産だと思うんです。さらに、女衆や子どもは歌に合わせて土を踏み固める「千本突き」をし、男衆が石を積み重ねるその作り方は、流域に継承されてきた文化だったんです。

文字通り埋もれていたこの資産を未来に継承していくことで地元を元気にしようと、私の父が声をあげました。その頃設立したのが、環境文化研究所です。そうして地元の人と協力して復活させた「アカタン砂防堰堤群」は、2004年7月に国の登録有形文化財となり、今でもその機能を発揮しながら福井の観光名所にもなっています。こうして親子二代に渡り、日野川流域の環境と文化の継承活動に深く入り込んで行くわけです。

日野川流域にとって、ミズベは生活と密接につながった文化なんですね。

流域文化はどうしたら継承していけるのか？ホワイトカラーの大人たちを集めて話をするのも大事だけど、この地域を担っていく子どもたちにきちんと伝えることは、もっと大事。じゃあ、どうやったら子どもたちに伝わるか？子どもを並べて授業するの？いやいや、そんなことでは自然のすべては伝えられないだろう。そう考えた時に、「自然体験」や「環境教育」というキーワードに巡り会っていきます。

それまでも環境教育が大事だという認識はあって、10年以上前から森や山や自然などの体験活動に携わってはいたんです。ただ、そのころはまだ川の体験活動が少なかった。そこで「NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会」（以下RAC）に出会いました。川をフィールドにして活動している各地のNPO法人・市民団体が参加して2000年に設立された、日本で唯一の、川の専門家の集まりです。RACでは子どもたちに川のことを教える指導者を育成しているのですが、その中でも最高位であるトレーナーの資格を取得しました。

さらに、地域をミズベに巻き込む活動へシフトしていったわけですね。

2009年に「日野川に砂礫河原をとりもどす会」というプロジェクトを立ち上げました。砂礫（されき）河原というのは、小石から比較的大きい石までさまざまなタイプの石がある河原のことで、川魚の住みやすい環境です。今でこそ日野川は整備されてロケーションもよくなりましたが、このプロジェクトを立ち上げる前までは草や木が無尽蔵に生えていました。ジャングル化したミズベはとても危険です。洪水の阻害にもなるし、人がなかなか近づけなくなり犯罪の温床にもなる。砂礫河原が復活すれば、川に棲む生きものだけでなく、地域住民にとっての環境改善にもなる。

日野川流域の市民団体はもちろん、漁協や行政、研究者の方々と協力して活動を開始。砂礫の上の土砂を重機で取り除いたり草木を刈り取ったりして、河原の姿を甦らせました。

しかし、水の量や流れ方などが変われば再び土砂で埋まる場所もありますし、定期的にメンテナンスしていかなければ木や草が生える。そのためにも、もっと多くの流域市民の人に活動を知ってもらい、参加してもらいたい。そこで、まずはせっかく復活したこの砂礫河原に来てもらう取り組みを始めました。

整備されたすばらしい河原でも興味がないと誰も来ない。そこに興味のひと雫を落としたんですね。

2009年、「そうだ！川に行こう！」をスタートしました。8,000匹ほど放流したアユを手で掴まえる手づかみ漁や、ラフティングやEボートでの川流れ、砂礫河原の生きもの観察など、川遊びを通して日野川の魅力を発見し、砂礫河原への関心を高めるイベントです。同時に、子どもたちにはライフジャケットを貸し出し、川のリスクもきちんと伝える。環境教育の場でもあります。

そして回を重ね調査したところ、25～35歳の若い世代（独身者）があまりお見えでないことに気づきました。「そうだ！川に行こう！」に来るのは、親子連れやお孫さんと一緒など、家族連れが多いんです。このイベントに来ていない世代にも合うミズベが必ずあるはずだから、ぜひそういう企画をしたいと思ったんです。長くなりましたが（笑）、それが「おしゃれなり・BAR」着想のきっかけです。

明治30年代に築造されたアカタン砂防堰堤群は、100年以上を経た今も周囲の自然景観と調和しながら砂防堰堤として機能しています。